

～戦後70年を迎えて～

# 若者達が見た戦争

太平洋戦争が終結して今年で70年。

多大な犠牲を出したこの戦争で、中心的な役割を果たしたのが当時の若者たちでした。

中でも海軍の鹿屋、笠野原、串良の3つの基地を抱えていた鹿屋市には、特別攻撃隊員として全国から多数の若者が集結し、尊い命が失われました。

また地元からも女学生などが学徒動員され工場での労働を行ったり、

子どもたちが滑走路の石ころ拾いや<sup>えんたいごう</sup>掩体壕作りを行うなど、

戦争は軍人のみならず市民の生活にも大きな影響を与えました。

当時の若者はどんな体験をし、どんな事を考えていたのでしょうか。

戦争について語る事ができる人が減り続ける中、70年前の記憶を辿り、

今改めて平和や命の大切さについて考えます。

## 鹿屋会談

昭和16年12月8日、日本はハワイの真珠湾に停泊していたアメリカの艦隊と基地に奇襲攻撃を行い、太平洋戦争が幕開けしました。実はこの真珠湾攻撃には鹿屋が大きく関わっています。

昭和16年2月、鹿屋に司令部を置く第11航空艦隊の大西瀧治郎参謀長は、山本五十六<sup>いそむく</sup>連合艦隊司令長官からの手紙を手に、志布志湾に停泊していた第1航空艦隊の源田實<sup>げんたみさる</sup>参謀を鹿屋基地内の参謀長公室に呼び出して極秘会談（通称・鹿屋会談）を行いました。

手紙には「国際情勢の如何<sup>いかん</sup>によっては、日米開戦に至るかもしれない。我が方は何か余程思い切った戦法をとらなければ勝つことはできない。そ

れには、ハワイ方面にある米国艦隊主力を痛撃し、当分の間、米国艦隊の西太平洋侵攻を不可能にしなければならぬ。この作戦をどのような方法によつて実施すれば良いか研究してほしい。」と書かれていました。手紙を一読した源田参謀に対し、大西参謀長は攻撃方法の研究を打診します。こうして生まれた作戦が真珠湾攻撃でした。

## 戦局悪化と特攻

真珠湾攻撃やマレー沖海戦、セイロン沖海戦で勝利を収め、序盤こそ戦いを優位に進めた日本でしたが、昭和17年6月のミッドウェー海戦で、米機動部隊の反撃を受け空母4隻を失うという大敗北を喫しました。また昭和19年6月のマリアナ沖海戦では、動員した艦載機のほとんどを失うなど壊滅的な打撃を与えられてしまいます。

他にもサイパン陥落、インパール作戦の失敗などが重なり窮地に立たされた日本は、アメリカをはじめとした連合軍の沖繩及び本土への上陸阻止と局面打開を目的として、爆弾を抱えたまま敵艦船に体当たりする「特攻」を作戦として採用します。そしてここ鹿屋から多くの若者が飛び立っていったのです。

鹿屋会談が行われた参謀長公室がある一ビルの当時（上）と現在（下）の写真



※一ビルは今年度中に解体予定です



整列する特攻隊員（鹿屋航空基地史料館提供）